ージにあこがれ，ひもじさをこらえる子供のような気分におそわれ続けた。また〃最近女性の職場進出がふえているが，身近な例からみて共かせぎ夫婦の子どもは有名大学に行っているケースが少ないようです。忙しくて子供にあまり手がまわらない云々……〃と影山裕子氏が云われているように私も娘をいわゆる有名大学に入れることはできなかった。しかし勿論後悔しているわけではない。朝6時に起きて夜11時半ころ就床するまでの私の日課は，姑が亡くなってから一層めまぐるしく，おそい夕食が終るとそのままこたつの中でうたた寝をすることもある。元旦の新聞の〃高いびき派手に横たう妻の顔〃（周作）の句はまことに身にしみてほろ苦い笑いをさそったが，〃愚かさや胸にしみ入る妻の愚痴〃というようにはなるまいと自戒している。長女が生まれたころは有職女性中既婚女性のしめる割合は30％であったが，51年度には64％に伸びているという。心強い限りである。

ユングフラウ瞥見記

赤木　健

本稿は1975年7月～9月にロンドンに滞在する機会があり，その際スイス，イタリヤの旅行班に加わり，スイス巡回の側見聞した日記の一部を記したものである。

第1日，旅行班はバスに乗り，スイス南端の別荘地ルガノを出発し，北々西にベンチナ川を溯りアイロロ町に至り，それより北西に急坂を登り，片麻岩系岩石の発達するサンゴタルド峠（2,108 m）を越えて峠下で休憩した。これより道を北に降り，ホスペンタール部落を過ぎアンダーマットで昼食をとり，北進してワッセン町で銀行に立寄りスイス・フランの両替をした。これより道を西に進み，片麻岩より成るスーステン峠（2,224 m）越の道となる。峠の南にはスーステン・ホルン（3,504 m）の高峰が聳え，これより発する氷河が横たわり眺望は壮観である。峠より西に羊腸とした道路を西に約1,000 m余下り，ガードメン部落を通過，マイリンゲルに到着し約20分休憩する。これより西に進みブリエンツ部落を通り，湖の北岸を西にインターラーケンに到り，これより南に谷を登り，グリンデルワルトに到着ホテル・サンスターに投宿した。当地は標高1,034 mで，アイガー及びシュレック・ホルン等の高峰を仰ぎ，周辺に広々とした牧草地帯を控えた良い環境に囲まれた登山口で，ホテル，レストラン，土産物店，スポーツ店，観光協会等が立並ぶ山岳人の町である。

第2日，朝ホテルを出て，ウェンゲル・アルプ鉄道経営の電車で，アイガー峰の東陵に沿って広がる牧場の中を西方に進み，アルビグレン駅を過ぎる附近から，目前にアイガーの北壁が迫ってくる。そして電車はその下をしばらく登り，やがて広々とした緑のクライネ・シャイデック部落に到着し下車する。当地はグリンデルワルトより約1,027 m高位を占め，ホテル，レストラン，土産物店が並び，アルプス観光客の集合地である。

これよりユングフラウ鉄道経営のユングフラウ・ヨッホ行の電車に乗換え，アイガー峰北麓の草原を南方に進み，間もなくアイガー及びメンヒ両峰の山体内に隧道により入り，視界は閉ざされる。附近の岩層は黒色の堅岩より成り白色岩脈の貫入体が観察される。

そして電車は始発駅から終点迄の所要時間は，40分でその高度差1,493 mを登り，終着駅ユング

フラウ・ヨッホ（欧州駅最高位）に到着する。駅の周囲の岩磐は素掘のままで，鉱山の坑内見張同様の観があるが，暗の中に駅名を記した電光板（3,554 m）が示されている。駅から坑道が分岐し，東向の坑口のテラスからは，遙に聳立する4,000m級のフィーセル・ホルン及びフィンステル・ホルン等の山々やアレッチ氷河を眺めることができ，他の坑口のテラスからは，ユングフラウ（4,158m）の背を越えてその頂上を見上げることができ，共に展望が雄大である。また氷河を貫いた「氷の宮殿」の室には氷の彫刻が刻まれているが，氷床の氷が融けて，足もとが極めて不安定である。

正午過ヨッホ駅に暇を告げて，クライネ・シャイデックに降り，ホテルで昼食をとり休息する。再びウェンゲル・アルプ鉄道の電車により，グリンデルワルトに帰着の上，これよりベルナー・オーバランド鉄道経営の電車に乗換え，インターラーケンに降りた。当地は湖に結ばれた盆地の別荘地で，特有の工芸品を売る店が多い。

これよりバスに乗換え，再びブリエンツ湖の辺を東進，ブルニヒ峠を越え北上し，緑の森林帯を進み，ルッチェルン市に入り投宿した。

リーダー養成のための附属学校を

朝倉　隆太郎

東京教育大学とお茶の水女子大学は，それぞれ東京高等師範学校と東京女子高等師範学校とを前身とし，大塚の地で寄り添って歩み続けてきた。高師・女高師の目的は中等教員の養成にあったので，ともに附属中学校（旧制）及び附属高等女学校を併設していた。それは現在附属高等学校・中学校になっている。私は昭和２２年から３１年までの９年間，東京教育大附属高校に社会科教師として勤務していたのであるが，その卒業生の海外における活躍状況から，国立大学附属学校が果たしてきた役割の一端を考えてみたいと思う。

東京教育大附属高校の卒業生名簿（昭和５２年８月末現在調べ）によって，海外在住者数を数えると，２４７名である。

年令別にみると，８５才以上１，８０～８４才１，７０～７４才１，６５～６９才１，６０～６４才４，５５～５９才５，５０～５４才１２，４５～４９才１３，４０～４４才５２，３５～３９才６７，３０～３４才５４，２５～２９才２７，１９～２４才９となり，３５～３９才の働き盛りの年令層を極大値とした美しいカーブを描く。極大値の前後の階層を合わせた３０～４４才の計は１７４名で全体の７０％を占める。

地域別にその分布をみると，北アメリカ１２１，中南アメリカ１６，ヨーロッパ７７，アフリカ６，アジア２２，オセアニア５で，全世界に及ぶ。国別では合衆国の１０３名を第１位とし，西ドイツ（２３），フランス（１９），カナダ（１８），イギリス（１３）と続き，ニューヨークには２７名ワシントンＤＣには６人がおり，それぞれ附属会を開催していると聞く。昭和４９年に文部省在外研究員として合衆国とイギリスに出かけたとき，旅先で附属で担任した生徒に出合い，その活躍の様子を心強く見聞した。航空会社に勤めるＦ君は数百億円単位の航空機の購入に折衝の苦心を話してくれ